

NPO化学物質による大気汚染から健康を守る会

通称:VOC研

25年度後期の活動

つづき

2014 May. 5

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-4-5, フタバ九段ビル3F, (株)森上教育研究所内

電話: 080-6593-2768, FAX: 03-03-3264-1275

URL: <http://www.npovoc.org/> メール: voc@kxe.biglobe.ne.jp

13章 著書紹介

VOC研会員がお書きになった会員に役立つ近年の名著が3冊あります。もっと早くご紹介すべきでしたが、遅くなったことをお詫びします。

① 嵯峨井勝著「酸化ストレスから身体をまもる活性酸素から読み解く病気予防」岩波書店、2010年

著者は、1900年代の自動車排気ガス汚染、特にジーゼルエンジン排気ガスががすましく、未熟なエンジン技術と不十分な道路インフラでエンジンからの浮遊性粉じん（PM2.5を含み、多種類の有機化合物を吸着した）、未燃燃料（ガソリン由来のベンゼン、トルエン、キシレンや潤滑油由来の四エチル鉛その他のVOCs）、不適切な燃焼での生成物（一酸化炭素、NOx）による沿道汚染とオキシダント生成による広範な都市環境汚染の喘息等健康影響の重大さについて、ネズミに吸気させる実験装置を作り医学的にはじめて関連を明らかに立証した研究者である。人が便利さと経済性をのみ追及する時に、未熟な科学技術で作り出す空気中の化学物質の危険性をしてきた先導的な研究であった。啓発書として「安全な空気を取り戻すために・・・目に見えない排気ガス汚染の恐ろしさ」岩波ブックレットも執筆された。著者らのそうした研究が世を動かし、交通渋滞を緩和する道路行政とエンジン設計やガソリンおよび潤滑油の改良に各メーカーの必死の努力が応じて、自動車台数の急速な増大にも拘らず排気ガス公害は格段に減少した。本書は、そのような貢献者の著者による個人的に実行できる一般的健康対策の化学面での指導書である。医学的に環境から取り入れる化学物質の体内での化学作用と多くの生活習慣病の関係が、専門的に詳しいが分かりやすく解説され、後半ではそれに対する食品やサプリメント、および運動党の生活習慣での具体的防御方法が述べられている。ことに医学的機序の説明が詳しく、化学物質被害に苦しむ当会会員に紹介したい好著である。

② 水野玲子著、「新農薬ネオニコチノイドが日本を脅かす、もうひとつの安全神話」七つ森書館、2012

帯封に、“この農薬は、放射性物質のように目に見えず、臭いもない。だからどれだけこの毒物が日本の野山を多い農作物を汚染していても、誰にも気づかれない。・・・”とかかかれてあるが、空気中有害化学物質の恐ろしさはまさにそれである。しばらく前から使われていた重大毒性のリン系農薬は目に見える噴霧の煙や不快な臭いで危険を察知して退避することもできた。しかし新農薬のネオニコチノイドは、臭いも噴霧の煙も感じないうちに、あらゆる昆虫がばたりと姿を消し、花は実ることなくむなしく落ちて、餌を失った鳥たち（特に虫のみを餌とする渡り鳥）もはたと姿を消し、人は何故とはなしに体調を崩した。本書には特に農業地域に広がるそういう有様を、九州の島から北海道まで全国を馳せまわって、養蜂者や農業者、被害者を診療した医師達と面談して調べた著者の驚きが、勢いある筆跡で伝わってくる。農業者や農村だけでなく、農薬で育った野菜・果物や茶葉を常用する都会の住民、殺虫処理された木材での校舎で学ぶ子供たちの健康影響の懸念も訴えている警告の書である。

③ 岡田幹司著「ミツバチ大量死は警告する」集英社新書、2013

人が化学物質で被害を受けて苦しんでいても問題にされない。けれどもミツバチが死ねば問題になる。経済効果とは人にとってそんなに大きな問題なのだと思います。これまで順調に営まれていたミツバチの養蜂による蜂蜜生産と花粉媒介による農業（特にハウス栽培と果樹）に大きな打撃が生じた。ミツバチが急に変調し、巣に戻らなくなり、病弱になり、群れが崩壊し始めたのである。経営に打撃を受けた養蜂家と農業者の訴えで産業行政があわて、学者たちが原因を論じ始めた。やがて本当の原因が新農薬ネオニコチノイドのせいらしいと認められる。本書は、ミツバチの生態の調査から始まり、養蜂の歴史や学会の論争に至るまで綿密な資料調査でその経過をつづっている。それぞれの記述が新鮮で興味深く読める。問題の核心は原因についての学者の論争と行政の対応である。人に対する空気汚染の影響が、化学分析では不明でも疫学調査で明確になるように、ミツバチの大量死もフィールドの全般的な生物変動で一目瞭然であろうに、実験室的な立証とそれに対する寒々とした無益な論争の無益さが描き出されている。生活体験が希薄で、朝には電車に飛び乗り日暮れてから電車で帰り、日中はビルにこもってパソコンと論文が情報源の研究者のむなしさが胸にしみる。外に出て歩くといい。実験室では再現し難い複雑条件の自然になかで、生物全体が苦しみ急速に世界が変貌しているのが正確に分かるだろう。経済価値があることで人社会に注目されるミツバチだけがやっと教えてくれたこの警告を、幅広い環境変化全体のものだ。本書は、綿密で正確に組み立てられた取材と記述によって、はからずも急速な便利さと経済効果追及についていけない近年の環境問題に対処する人間社会の愚かさや無力さを言外にくっきりと描き出した。ミツバチ問題の書でありながら、環境と命に関する警告の書として読める重厚な名著として一読をお勧めする。